

§ 6 問答の観点からの指示論 (その2)

1, 主張型同一性言明を答えとする問いと、宣言型同一性言明を答えとする問いの違い

■宣言型同一性言明を答えとする問いは、まだ存在しないものを指示する。

③「あなたの注文は何ですか」「うどん」

「私が注文するもの＝うどん」

■しかし、問いがまだ存在しないものを指示していても、返答が宣言にならない場合がある。

④「今年の世界陸上の100走の一位は誰でしょうか」「ボルトです」

「今年の世界陸上の100走の一位＝ボルト」(予想)

■宣言と予想の違い

・宣言の主語は一人称となることが多く、予想の主語は1, 2, 3人称がありうる。

行為遂行動詞を用いた宣言の場合には、主語が一人称になるが、行為遂行動詞を用いない宣言(主張型以外の発話)の場合には、一人称が守護となるとはかぎらない。例えば、「被告人〇〇は有罪である」が断言型宣言、「饅頭を下さい」という依頼の場合。

・発話の時点では宣言も予想も真理値を持たないが、予想は、ある時が来れば、真理値をもつ。

・「なぜ、そういうのか」と問い返された時、そのように語る理由を答えるのが宣言であり、そのように語る客観的根拠を答えるのが予想である。

■予想と似ている宣言

⑤「あなたは今年の世界陸上の100走で誰に一位になってほしいですか」「ボルト」

「私が今年の世界陸上の100走で一位になって欲しい人＝ボルト」

2, 主張型の答えと宣言型の答えの違い

②「あなたが注文したものはなにですか」「うどんです」記述

「私が注文したもの＝うどん」

③「あなたが注文するものはなにですか」「うどんです」宣言

「私が注文するもの＝うどん」

②と③の答えの「うどん」は異なっている。なぜなら、この「うどん」という一語文発話が、何かを指示することになるのは、それが問いに対する答えとして発話されることによってであり、それらが関係する問いが異なっているので、2つの「うどん」も異なった仕方で指示を行うからである。

共通点1:前者は、「私がすでに注文したものが指示する対象を、指示している。この場合には、その対象を指示する仕方は、「うどん」以外にもあるだろう。「彼が注文したのと同じもの」「このみせで一番美味しいもの」「一番早く出てくるもの」などである。後者の場合にも、「うどん」と同じ対象を指す、上記の方法で、注文することは可能である。

異なる点1:前者との違いは、後者の場合には、「そば」とか「牛丼」とかを注文することも可能であるということにある。(「あなたが注文するものはなにですか」と問われて、「うどん」と答えることも、「そば」と答える事もできる。もし宣言の発話が真理値をもつとすると、どちらの発話も真でありうるということになる。しかしこれは矛盾ではないだろうか。この意味からも、宣言型発話は、真理値をもたないといえる。)

異なる点2:「そば」と注文することもできたのに、「うどん」と注文したのはなぜですか」と問われたときに、彼は即座に「このうどんがおいしいからです」とか「昨日そばを食べたからです」とか、答えるだろう。それに対して②場合には「うどん」と答えたのはなぜですか」と問われたなら、その答えは「そのように記憶しているからです」などと答えるだろう。(「あなたは本当にうどんを注文するのですか」とか「あなたは本当にうどんを注文したのですか」と問われて、答えを確かめるために問い合わせるもの、「なぜ」と問われた時の答えと同じである。)

「うどん」が何かの指示になるのは、それが問いに対する答えとして発話されるからである。問いが指示を求めているからである。前者は、存在しているものを指示する。後者は、まだ存在していないものを指示する。では、まだ存在していないものを指示するとはどういうことだろうか。それは、指示することによって、それを存在させるということである。世界を構成することである。

■世界の記述と世界の構成

・世界について初めて記述することもまた、ある意味では、世界を構成することである。なぜなら、世界は記述される前には、未規定であったといえるからである。たとえば、ガリレイが望遠鏡で土星をみて「土星には輪のようなものがある」といったとき、ガガーリンが地球へ帰って「地球は青かった」といったとき、それらは世界についての記述であるが、世界を構成することでもある。

・世界と言葉の定義「これはフロギストンである」という発話は、世界を構成することである。その定義が反復されるときには、それは世界の記述である、あるいは世界の構成の反復である。(「猫」という言葉を使用するたびに、私たちが「猫」という言葉の意味を再確認しているのだとすると、全ての言葉の使用は、言葉の再定義であり、世界の再構成である。)通常の意味の世界の記述とは、最初に世界のあり方が宣言され、それによって世界が構成されたあとに、その宣言された文を反復することである。それは宣言された世界についての記述になる。

・ヒッグス粒子の存在を予測し、その後ヒッグス粒子を発見するとき、つまり、「〇〇の性質を持つ粒子(ヒッグス粒子)が存在するだろう」と発話し、その後「これは〇〇の性質をもつ粒子(ヒッグス粒子)である」と発話するとき、前者は予測であるが、後者は宣言だろうか?記述だろうか?

■世界を構成するいくつかの仕方

- ・世界について初めて記述する。「地球は青かった」
- ・言語的宣言 世界について定義する。「この山を富士山と呼ぶ」
- ・言語外的宣言 定義以外の宣言をする。「富士山を世界遺産に認定する」
- ・約束、命令、「うどん」を注文すること。

■宣言の分類

サールは次のように区別していた。

- ①a: 言語外的宣言(extra-linguistic declaration) 「破門する」
- ①b: 超自然的宣言(supernatural declaration) 「光りあれ」「きっと良くなるよ」「ハルサ」
- ①c: 言語的宣言(linguistic declaration) 「命名する」
- ②「断言的宣言型(assertive declaration)」「アウト」

(サールは「宣言」を行為遂行動詞を含む文(行為遂行文)の発話だけを考えていたが、前に提案したように、もし行為遂行動詞を含まない主張型以外の発話も宣言(同一性の宣言)だと考える。このような「宣言」の定義の違いは、上記の宣言の分類の不十分さとは無関係である。なぜなら、全ての真理値を持たない発話は、行為遂行文の発話に言い換えられるだろうからである。)

実は、この分類からみられる宣言がある。たしかに、例えば、「うどんを注文します」や「ビザを申請します」は、言語外的な制度を前提した①aに属するだろう。しかし、「これからどうしますか」と問われて「散歩に行きます」と答えるとき、あるいは、「お昼はなに？」と問われて「お蕎麦を作るよ」と答えるとき、これらは言語外的な制度を前提していないだろう。そこで次のような再分類を提案したい。

- ①言語的宣言(linguistic declaration) 「命名する」
- ②非制度的宣言 「散歩に行きます」
- ③制度的宣言(サールの言う「言語外的宣言」)
- ④断言的宣言
- ⑤超自然的宣言「だいじょうぶ」

3、問い「同じようにある宣言の反復でありながら、なぜ次の区別が生じるのか」

- 「棒Sの長さ=1メートル」アプリアリな偶然的真理
- 「私が注文するものの種類=うどん」アポステリアリな偶然的真理
- 「スピノザ=t1に破門された人」アポステリアリな偶然的真理
- 「この種のお菓子=ショコラデニッシュ」?
- 「水の沸点=100度」アプリアリな偶然的真理
- 「金=原子番号79の元素」アポステリアリな必然的真理
- 「猫は、哺乳類である」アポステリアリな必然的真理?

(1) クリプキによる「アプリアリ」「必然的」「分析的」の定義

クリプキは、『名指しと必然性』において、「アプリアリ」と「アポステリアリ」、「分析的」と「総合的」、「必然的」と「偶然的」の区別を主張している。

(参考文献, Saul Kripke, Naming and Necessity, Brackwell, 1972.)

ソール A. クリプキ『名指しと必然性』八木沢敬、野家啓一訳、産業図書、1985。以下の引用は、この翻訳からのものである。)

カントはこの二つの外延は一致すると考えた。『純粹理性批判』の第二版序論では、カントは、「アприオリな判断」とは、「必然的で厳密に普遍的な判断」だと説明している。「アポステリオリ」と「偶然性」の外延は一致する。

しかし、クリプキはこれらを区別する。

「アприオリ」「アポステリオリ」とは、認識論的な概念であり、「必然的」「偶然的」とは形而上学の概念である。これを分けるとたとえばつぎのようになる。

	アприオリ	アポステリオリ
必然的	①	②
偶然的	③	④

①アприオリで必然的:これは「分析的」と呼ばれる。

例:「二等辺三角形=二等角三角形」「独身男とは独身男である」「独身男は、結婚していない」

「分析的言明は何らかの意味で、その<意味>によって真であり、またその<意味>によって全ての可能世界で真であるということ

を、手っ取り早く**約定(stipulation)の問題**だとしておこう。すると、**分析的に真であるものは、必然的かつアприオリである**ということになる。 (これは多少とも約定上のことである)」45

②アポステリオリで必然的

「固有名 A=固有名 B」の形式

「エヴェレスト=ゴーリサンカー」

「ペスペラスは、フォスフォラスである」

「自然種名 A=自然種名 C」の形式

「金は元素番号79である」「金は黄色い」「猫は動物である」

「とりわけ現在の科学理論では、原子番号79の元素であることは、われわれが理解する限りで金の本性の一部なのである。それゆえ金が原子番号79の元素であることは、必然的であって偶然的ではないということになる。」148

③アприオリで偶然的

「固有名=確定記述」の形式

例:「1メートル=メートル原器の長さ」、「水の沸騰点は、100度である」

「ニクソン=1970年のアメリカ大統領」(これが「ニクソン」の定義であるとき)

{言語的宣言は、これになるだろう}

④アポステリオリで偶然的

例:2010年のアメリカ大統領は、男性である

この部屋には象がいはいない。

<「固定指示詞」(rigid designator)の説明>

「ある言葉があらゆる可能世界において同じ対象を指示するならば、それを**固定指示子**(rigid designator)と呼ぼう。そうでない場合は、非固定(nonrigid)または偶然的指示子(accidental designator)と呼ぼう。もちろんわれわれは、対象がすべての可能世界に存在することを要求しない。…ある性質がある対象に本質的であると考えるとき、われわれは普通、その対象が存在したであろうどんな場合においても、その性質はその対象について真となる、といっているのである。**必然的存在者を指す固定指示子は、強い意味で固定的と呼ぶことが出来る。**」55

<メートル原器の例による説明>

「1メートルはSの長さであるとする、ただしSはパリにある一定の棒である」62

「1メートル」という句と「t0におけるSの長さ」という句の間には、直観的な違いがある。第一の句は、一定の長さをすべての可能世界で固定的に指示し、その長さは現実世界ではたまたた0における棒Sの長さであるということの意味する。」64 ゆえに、「t0においてSが1メートルの長さだということは必然的真理とはならない。」64

「だとすれば、**棒Sへの指示によってメートル法を固定した人にとって**、「棒Sはt0において1メートルの長さである」という言明はいかなる認識論的地位をしめるのであろうか。彼はそのことをアプリアリに知っているように思われるであろう。なぜなら、「1メートル」という名辞の指示を固定するために棒Sを使ったのなら、(略語や同義語による定義ではない)この種の定義の結果として、Sが1メートルの長さであることをそれ以上調べなくても彼は自動的に知るからである。他方、たとえSが1メートルの基準として使われるとしても、「1メートル」が固定指示子と見なされるならば、「Sは1メートルの長さである」の**形而上学的地位は、偶然的言明のそれであろう**。適当な圧力とひずみ、加熱や冷却の元では、Sはt0においてさえ1メートル以外の長さであったかもしれない。(「水は海面100度で沸騰する」といった言明も、同じような地位を持ちうる)。それゆえこの意味において、**偶然的でアプリアリな真理が存在するのである。**」65

ミニレポートの課題

「オレンジは、オレンジ色である」

これは、アプリアリかアポステリアか、必然的か偶然的か？